宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
定価 一年送料共 1000円

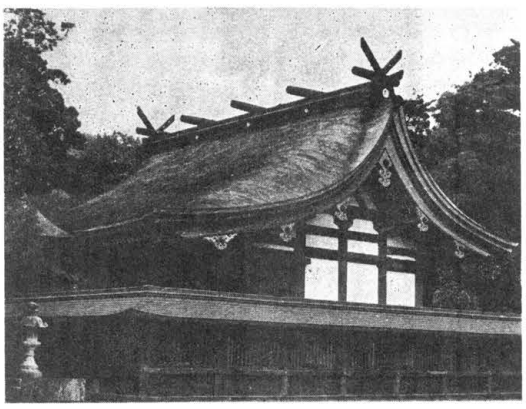
神具、装束
結婚式場用品
九州店
本社
株式会社 井筒
福岡市博多区東公園一-三一（〒八一三）
電話福岡（九二）六五一-九四五六番
京都市下京区油小路八条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一-三四一（代）四番
（〇七五）三三一-二三四・〇七七番

社号御改称奉告祭

―宗像神社を宗像大社と改称―

千三百年来の重儀

盛大厳粛裡に斎行



宗像大社号御改称奉告祭は、錦秋の十月九日午前十一時、神郡宗像氏の氏子崇敬者、神社関係者多数参列の下盛大に斎行された。

当社は、古くは宗像神社（かんやしろ）と称され、延喜の制度（約一、〇〇〇年前）の頃より名神大社として朝廷公事の奉幣に預っていた、権治四隆に国家の宗祀として最高の社格である官幣大社宗像神社に御昇格されていたが、今次大戦後、神道指令の発令により、官幣大社の社格が廃止された。

昭和二十七年宗教法人法の公布によって新たに「宗教法人宗像神社」として登記されていたが、通称「宗像大社」と呼称され、これに伴う不都合如が生じて来た。特に全国六千余社と及ぶ宗像神社奉斎社の総本宮として名実共に現在の威容を整えるに及んでは、社号を御改称して正式に「宗像大社」と呼ぶのが妥当ではないかと、幾度か審議を重ね、此度、昭和五十二年八月二日、神社本庁より承認書が交付され、同年九月二十二日を以って「宗教法人宗像大社」と称する事となった。

当日、定刻、幕津宮以下神職、諸員、参列員等御本殿に参進、献饌、宮司祝詞奏上に続き、当大社巫女による浦安舞が奏された。

又、神社本庁代表として、本庁常任理事福岡県神社庁長浄見晴夫氏、宗社会代表英彦山神宮宮司高千穂育英氏、宗像大社氏子会長中村清之氏を始め神社関係者、氏子会総代等が参列され、挙って御改称を奉祝申し上げ、御神威の発揚を祈念した。

宗像大社 第七回西日本菊花大会 準備進む

――深緑の境内三、〇〇〇鉢の菊花続々と搬入さる――

第七回西日本菊花大会は十一月一日より開催される。この準備は秋季大祭が完るとただちに開始された。十月十日には展示会場資材が境内に運び込まれさっそく展示ハウスの組立て作業が始まった。

十月二十三日には宗像町商工青壮年部の作業奉仕により菊花展示場八十五棟が完成した。

また菊花展最大の課題である菊花運搬車輌も四十五台の奉仕が決定し、十月三十一日には全ての搬入、展示が完了する運びとなった。

菊花の搬入は十月二十四日、津屋崎菊友会小沢新助氏製作の菊人形「足柄山の金太郎さん」が意気揚揚と入場手水舎前の総合花壇所定の位置に運び込まれた。翌二十五日には相屋吉貞町の当菊花会会長高原鹿吉氏の山水をあしらった総合花壇、二十六日には八幡西区の塩川辰雄氏、二十七日早前中に若松区の平野直義氏、八幡東区の前野まええ氏の名菊花が続々到着し、今大会の目玉ともいうべき五つの総合花壇が逸速く完成し参拝者の目を奪った。同二十七日深夜には遠来の、佐世保菊花会の菊花を満載した大型トラック五台が到着、この中には山口齢蓮氏が丹精込めて製作した三m五十cmもある大懸崖ものっており、この菊花は同氏の希望により競技には参加せず御神前に奉納したいということでさっそく神門両袖に飾られた。二十八日には宗像郡内、二十九日には鳥栖市、春日市の菊花搬入。三十日には全体の七〇%を一日で搬入、この日は各地より協賛の搬入車輌四十五台が菊花を満載して続々と到着。最初に筑豊菊友会、次に直方菊親会、自然流国芳会、八幡南部秋芳会、八幡東部秋芳会、若松菊友会、戸畑菊芝術協会、福岡菊花協会、粕屋菊友会、門司菊友会、久留米菊友会、熊本菊花会、佐賀菊花会、最後に大分県菊花会の菊花が搬入され、全ての菊花が勢ぞろい、境内は菊の香りに包まれた。

またこの日には、宗像青年会議所（片山一美理事長）の作業奉仕があり老齢者の多い菊花製作者の手伝をしていただき大変感謝された。

論説

道義意識と徒党心理

わが国史上の人物の中で、至誠純忠の人として何人も疑はない一人に和気清麿が挙げられる。愚に奢って遂には皇位を窺う僧道鏡、これに加担して栄達の手蔓を摑みたいゴマスリ神主ども、宇佐大神の託宣の真偽を確める大役に、清麿は一身はもとより一族の浮沈にかかる大事が懸っていた。

彼は無道の暴戻を生命を賭して、一族の興亡を無視にしても遂行の決意を固めた。悪逆の徒輩は彼れた。彼の信念は生きた。今、京都御所の西に護国神社として祀られている。筆者は護国であるべきだと思うが、王の字を用いたのには相当の理由があろう。

幕末の王政復古に活躍した志士、近くは第二次世界大戦に護国の鬼となった英霊、中には清麿の様に

沖・中両宮 秋季大祭終る

旧暦の九月十五日は宗像大社中津宮（福岡県宗像郡大島村鎮座）の秋季大祭日である。今年は十月二十七日が之に当り、二十日余りの晴天続きの中で、この日も快晴に恵まれ筑前大島は終日祭り気分で賑った。

これより先、同月二十日、沖・中両宮奉賛会役員を始め三千数名が、早朝より参籠殿に集合、予て準備と新調で〆縄作りに励み、青々とした〆縄五十余本を編み、中津宮拝殿前の大〆縄を始めとして境内各所の〆縄が取替えられた。

同二十六日の前日、各役員の奉仕によって幟が立てられ、御殿の幔幕が張られ、本殿東脇の境内には仮設舞台が設置された。

今年の春から崇敬者各位の熱誠あふるる御奉納が続き、本殿内の御神鏡、金幣、御厩、拝殿の御簾等が新調され、美しく飾られた御殿は清新な瑞気に包まれて今まで

にない秋祭りを迎えたのである。

午後二時から中津宮境内を守護し給う地主神の祭が斎行され、午後五時から高宮にある沖津宮遥拝所と中津宮とに於て秋季大祭菅宮祭が厳粛に執り行われた。

翌二十七日、午前八時半、大島宮崎部落に鎮座する境外末社厳島神社の秋祭りが執り行われた。小高い丘上の社殿に部落の各戸から三々五々戸主が参集する。太鼓の音があたりに木霊して、神職祝詞奏上、部落の代表が玉串を供えて敬虔な祈りを捧げた、祭りが終ると供えられた神酒で直会が行なわれた。

午前九時、沖津宮秋季大祭が沖津宮遥拝所に於て斎行された。同遥拝所は大島の北端、玄界灘を望む断崖上にある。白い幟りが風にはためく、遥拝所は遥かに拝する所、即ち拝殿で同所の奥の御扉を開けば洋上の沖ノ島がかすかに拝される。宮司の祝詞奏上、巫女の浦安舞が奏せられ、崇敬者の玉串が続く、沖ノ島が女人禁制の為か、この遥拝所での参拝は女性の方々が多い。

午前九時半、摂社御嶽神社の秋祭り。海抜二七二米の山上に鎮座する同社は大島農業関係者を始め福徳長寿の神として遠近崇敬者の信仰を集めている。好天に恵まれ多くの登拝者があった。

午前十一時、中津宮の秋季大祭が斎行された。遥拝所、御嶽神社を巡拝した多くの参拝者は既に拝殿前に参集。被いが修せられ、菅津宮司の祝詞奏上に続き、今度の氏子奉幣使に選ばれた中村村長が装束姿も凛々しく奉幣の祝詞を奏上、浦安舞の鈴の音が境内に響き渡り、崇敬者代表の玉串が続いて祭典を終了した。この後、本殿・拝殿調度奉納者各位に感謝状と記念品の贈呈式が行われた。眼海殿に於て参列者各位に直会が供せられ盛会裡に終了した。

午後一時から境内土俵上に於て小学生の相撲大会が展開され見物席から盛んな声援が続いた。

午後二時、境内特設舞台で村内各部落選出の演芸大会が開始され、舞踊等十六番が演じられ、拍手喝采の内に終演した。

中津宮の秋祭りがすむと、大島の秋はやがて終りを告げるのである。

本大祭に御奉賛を頂きました各位に紙上より厚く御礼申し上げます。

神郡宗像各所の秋祭り（その二）

◇縫殿神社 —勝浦 奴山—

津屋崎町奴山鎮座縫殿神社祭は十月十日、氏子関係者多数参列の下、当社よりの幣帛が供進され盛大に斎行、恒例によりドジョウ汁の饗膳に賑った。

縫殿神社は、古くより織幡神社と並び出緒ある神社で、呉（中国）の工人兄媛（えひめ）・弟媛（おとひめ）が祀られている。

日本書紀によると、中国より帰化した阿知使主（あちのおみ）は胸形大神の託宣によって工女兄媛（えひめ）を大神に奉献し織物を献って神恩に奉賽した。兄媛は機織（はたおり）の技を以って大神に奉仕し、筑紫の御使君（みつかいのきみ）の祖先になったと記している。

かくして宗像大社は神衣奉製の部民を従え、伊勢神宮と共に国家宗祀の重きにおかれたもので、縫殿神社も大社の発展と共に栄えたものと考えられるのである。

◇的原神社 —八並—

許斐山の麓、八並の里に鎮座する、宗像大社境五摂社八宮地嶽神社＝津屋崎・的原神社＝八並・王子神社＝玉丸・孔大寺神社＝池野・織幡神社＝鐘崎〉の一社である的原神社（日村社・宮司伊東聡氏）秋の例大祭は、絶好の秋日和に恵まれた十月十二日早朝十時より、伊東宮司奉仕、宗像大社献幣使参向のもと、地元宮総代脇野千郎氏、八並区長占部田幸氏外当番座代表、氏子崇敬者多数参列し厳かに斎行された。

神前には海川山野の種々の神饌が献供され、宗像大社よりの幣帛も奉られた。祭典は伊東宮司の打つ、古流許斐太鼓が韻々と境内に流れる中で始められた。祭主祝詞奏上に続き、宗像大社献幣使、祝詞奏上、玉串拝礼と式次第も遅滞なく進み、引続き拝殿に於いて、古式に則る御座（直会）が行なわれた。御座終了後一同退下し八並公民館で下座（今年の当番座主催の直会）が参列者をはじめ地区民一同出席し盛会に行なわれ、和気あいあいの内に秋の落日まで、盛大に行なわれた。

× ×

門司・宗像神社秋祭斎行

—出光興産㈱門司油槽所—

出光興産（株）門司油槽所（所長川原哲夫氏）構内の一角に鎮座の、当大社二分社の宗像神社秋祭が、錦秋の去る十月十二日早朝十時より宇都宮称官外職員二名出向奉仕のもと厳粛に斎行された。

祭典には、地元恒見八幡神社宮司石川正直氏も奉仕、出光門司支店長内田澄氏、同油槽所長大川哲夫氏以下所員多数、並に同油槽所の関連会社代表多数も参列、神前にこれまでの無事故操業を感謝奉告すると共に、今後の業務安全・繁栄を祈念し玉串奉奠を行い、式次第も遅滞なく完了した。

祭典終了後、参列者一同神殿前に特設された直会場で神酒拝戴を行った。

当日は絶好の秋日和で、時折そよぐ風は間防灘の潮の香を乗せ、広い構内には物音一つなく、祭主奏上の祝詞の声と拍手を打つ音、瀬戸内を行き交う船の気笛が遠く聞えてくる静寂な内に、一瞬自我を忘れる程であった。

犬と支那人

福岡県下から選抜した青年層に不知火も加わって、青年の船は十余日間中国を訪問した。昨年夏のことである。上海を始め北京などを巡歴して歓迎をうけ、日中親善と友邦解所の旅、これに同行した若いジャーナリストの話を聞いた。

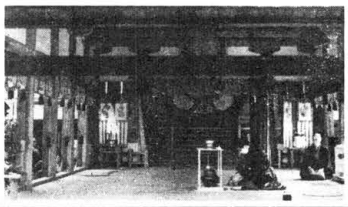
新聞放送の当らず触らずの表現と異り、中国人の笑顔の奥にある戦時の惨嘘の残影が、特に年輩の表情に隠されている話も出た。

お互に若い層は戦時に生れていない。交歓が流行の親善という歌い文句に過っておればよい。戦時に生きていた中国人の中には、ニコリともせずに憎しみの表情も見せたとか。

彼らは中国政府の方針に従って憎悪感を隠して、平静を装っているに過ぎない。残虐な扱いをうけた故郷の傷跡が、平和だ親交だと掛け声だけで、霧散解消するものであるまい。

吾人の部隊は、南京陥落の翌年

表千家家元・京舞井上流家元の献茶と献舞行わる



例年の行事となっている献茶、献舞が、神嘗祭当日の十月十七日午前十一時より当大社拝殿において、華道表千家家元・京舞井上流家元岡家元の奉仕で行われた。

例年この日は晴れの好天に恵まれているが、今年は特に二十数日に及ぶ晴天続きのさなか、清明澄心の早朝より表千家九州同門会、京舞関係の人々が参集し午前十時には、拝殿握奇の一般参列席は溢れんばかりの人数となった。

今年は家元高齢の為、千宗員若宗匠に献茶を奉納させ、御自分は後見として自席より厳しく見守られていた。

午前十一時斎館の大太鼓の合図で、勅使館より表千家家元千宗左宗匠、同千宗員若宗匠並びに高弟等の方々が宮司の案内で参進、祓舎でお祓を受け参列者で埋められた拝殿へ参進し、祭典が開始された。

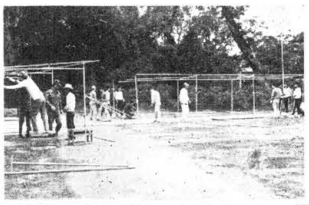
祭典は両奉納の儀が神前に奉告されたあと、献茶の儀と献舞の儀とが引続き行われた。

献茶の儀では若宗匠のお点前で濃茶と薄茶二服が点てられ、若宗匠自ら拝殿案上に奉案神職が神前に奉った。若宗匠のお点前が始まると参列席には緊張の雰囲気がみなぎり、濃茶・薄茶それぞれ点てられる度に緊張が緩み、ホッとした吐息にも似た安堵感が参列席を流れ、特に家元に変って若宗匠のお点前だけに一入であった、これで家元もさぞ御満足であっただろう。

続いて人間国宝京舞井上流・井上八千代家元による京舞（添文）奉納は、家元の一糸乱れぬ動作、静と動とが一体となった名手の舞ぶりに、しばし時のたつのを忘れさす程であった。

この後、宿衛舎では出先席、斎館では同円会席が設けられ、参会者はこの二つの副席で秋の茶の湯を満喫したであろう。

宗像町商工会青壮年部
菊花展々示会場作り奉仕



宗像大社菊花全国催の西日本菊花大会は本年で七回目の大会を迎え、十一月一日より二〇日まで開催される。西日本地区最大の地位を確保して久しいこの大会も数多くの悩み・問題をかかえているが展示会場作り作業もその一つであった。

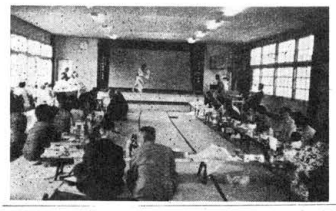
この問題を一挙に解決した宗像商工青壮年部の作業奉仕は、昭和四十九年度第四回大会より始められ当時の須藤部長を始め役員・部員の努力により同部の年間継続事業の一貫として毎年続いている。

本年度は去る十月二十三日の日曜日に白木部長を始めとした六十数名が午前九時拝殿前に集合し作業の安全を神前に祈念しさっそく奉仕作業を開始した。

作業は先づ千五百本の鉄骨材をボルトナットでしめつけ八十五棟の骨組をし、次に屋根張り、ヨシズ掛け、赤白の幕張り、懸崖花壇の台作りと進み、広い境内一杯に展示ハウスが組上り露呈した。同部員のほとんどが毎年参加奉仕しており、目標の作業工程は着々とスムーズに進み午前十一時四十分すぎには本日の奉仕作業の全てを終了した。

御陰で本年も無事菊花大会を迎えることができましたことを誌上をもち厚く御礼申し上げます。

遠賀宗像会三十周年を迎え
盛大に記念式典を斎行
―於、遠賀町中央公民館―



宗像郡出身者で結成されている遠賀宗像会（会長豊福善一氏・会員六十余名）の「結成三十周年記念式典」が錦秋の十月二十四日午前十時三十分より、遠賀町中央公民館に於いて、全会員出席のもと盛大に開催された。

式典は、副会長今橋田助氏の開式の辞に始まり、豊福会長挨拶、同会物故者への黙祷、高令者記念品贈呈では会長より代表者外添え氏（明治二十九年一月十日生）に記念品が手渡された。来賓挨拶では遠賀町々長柴田貫蔵氏、区長会長片山武司氏、宗像大社宇都宮祢宜の祝詞が行なわれ、引き続き宴に移り和やかな会場には、遠賀町民謡同好会による多種多芸の演芸、会員の福引等の余興も賑り沢山に繰り広げられ、会員一同時間の経つのも忘れ三十周年を祝っていた。

遠賀宗像会は戦後間もなく、初代会長の荒牧庄右衛門氏、現副会長の今橋田助氏が中心となって結成され最盛時には百八十余名の会員が在籍し団結も堅く、組織運営も活発に行なわれていたが、永い年月を経るにつれ物故会員も多くなり現在では、前述の如く会員六十余名となっている。しかし、豊福会長、今橋副会長を中心に、同会員の二、三世をはじめ、新に宗像の地より転入される人々も同会に加入され、団結心、故郷宗像を思う心は不変に続いている。

最後に遠賀宗像会三十周年を祝しますと共に、同会の今後益々の御発展、並に会員各位の御健勝を祈念申し上げます。

話題の新車をみる (三)
ニッサン・STANZAの巻

今回は日産自動車工業（株）よりの新発売された。"ニッサン・スタンザ"について述べてみよう。

日産では昭和五十二年八月、一六〇〇cc・四ドアセダンのスタンザを発表販売を開始した。

このスタンザは、去る五月にデビューした、ニュー・バイオレット/オースターの姉妹車で、クルマの性格としては「ありハイグレードな内外装をもったスペシャリティ・ファミリーセダン」を目指している。

全長は、バイオレット/オースター・セダンの四〇八〇㎜に対しスタンザは四一五〇㎜と長いがこれは大型バンパーの採用などによるものである。その他の外型寸法はオースター・セダンと同じである。

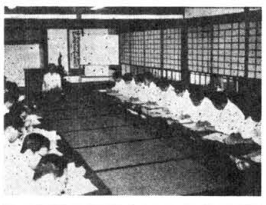
ボディ・シエルは四ドア・セダンだけだが仕様に応じてカスタム・シリーズとスポーティ・シリーズの二系統があり、カスタム・シリーズは、ラグジャリー、エクストラ、エクストラF、マキシムの四種仕様が、又、スポーティ・シリーズにはTS-E、TS-EF、GT-E、マキシマGT-Eの四種仕様がある。この内「E」の記号が付いている、カスタムのエクストラF、スポーティのTS-E、GT-E、マキシマGT-Eの四種は、燃料噴射装置付エンジン搭載車である。

エンジンは、L二六型四気筒一五九五ccで、気化器付は一〇〇P・S/六〇〇rpm、一三・五kgm、燃料噴射装置は一一〇PS/六二〇〇rpm、一三・八kgmの最高出力と最大トルクとなっている。

このニッサン・スタンザの語源は、イグリア語の"スタンザ"（STANZA）で、日本語訳では"部屋"の意みである。同車はその名の通り室内はゴージャスに旦、シックな雰囲気をもちオーナードライバーの好評を得ている。

（写真・マキシムGT-E）

出光興産株式会社
社員教育行なわる
―第十五期店主室社員研修―

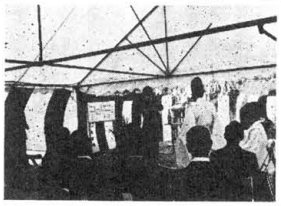


恒例の出光興産（株）店主室社員教育「宗像大社研修」が、去る十月二十六日～二十九日（二泊四日）の日程で、北は北海道、南は鹿児島までの各支店、製油所等より選抜された中堅社員二十六名が参加し厳粛に行なわれた。

研修生一同は二十五日夕刻、東京をたち二十六日早前、当大社に到着、研修始業奉告祭を行い、背広姿から白衣白袴に衣替え四日間の研修に入った。当大社での研修は主に「神社神道精神の理解を深めることにより社員の精神修養を行う」を目的に、未明の起床・禊祓・境内清掃・朝拝式・作法・講話・鎮魂等のスケジュールを就寝の午後十時まで組込み研修生一同熱心に取り組み、終了時には白衣姿も板につき、当社職員も驚く程であった。

この店主室社員教育は、例年、春秋の二回行なわれ、伊勢の神宮参拝からスタートし、東京で四十日間の教育があり、最後の仕上げとして当大社での四日間の研修が行なわれる。今回で第十五期（回）を迎えた。

県立少年自然の家
「玄海の家」体育館起工式



去る十月十七日、玄界の海もさわやかな秋晴れのもと、福岡県立少年自然の家「玄海の家」の体育館起工式が盛大に挙行された。

この少年自然の家は昭和四十九年度に、福岡県政の中で健全な青少年を育成することを目的として建設された社会教育施設である。

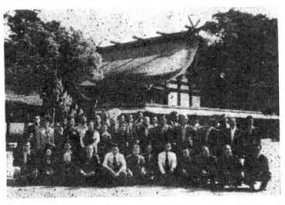
白い砂と緑の松林に囲まれたすばらしい環境のなかに、日頃家庭や学校では体験できない集団生活、宿泊訓練等を通じて自律、協同、友愛、奉仕などの尊さを身に付けさせ、心身共にたくましい人の育成を計る施設である。

開設以来利用する児童生徒の数が増かの一途をたどって居る状態の中で、体育館の施設がなく、雨天や夜間の体育レクリエーション活動をより円滑に推進するための必須の施設として建設が急がれていた。

福岡県知事の挨拶の中に、県政の柱の一つに「物から人へ」そして「新しい時代に対応する人づくり」と言うことから、本年度予算措置がなされて総工費一億三千万円を以って体育館着工のはこびとなった次第、完成は五十三年三月末の予定となっている。

体育館の概要は次の通りとなっている。鉄筋コンクリート一部二階建、面積一階一〇〇六㎡、二階一六六㎡、施設一階はバスケット、バレーコート各二面とその放送・談話室、倉庫、便所等、二階は各種展示会場等に利用、その他子供向けの遊具施設も備え付けられることになっている。

京都「松尾大社」
宗像会五十名参拝



京都市の松尾大社の氏子で組織されている「宗像会」（会長内藤健雄氏、会員千五百名）の代表五十名が、錦秋の十月二十九日参拝された。

同宗像会は、松尾大社の御祭神である中津姫神（当宗像大社の御祭神である宗像三女神の内、市杵島姫神の別名）を特別に崇拝する人々で組織され、会名も御祭神の総本宮である宗像大社の「宗像」をとり「宗像会」と名付け組織運営されている。

松尾大社では、京都三大祭の一つ時代祭を斎行しているが、この祭典に同大社の御祭神の神輿九台が出御され、その内の一台が中津姫神であり、この神輿を奉斎奉仕するのが宗像会の人々である。

今度の同会代表の参拝は、会長内藤健雄氏外役員が「宗像神を崇拝し、宗像会を名のるのに、総本宮の宗像大社に参拝したことのない会員が多いので是非一度」との考えで去る七月、当大社に参拝視察を行い帰京後企画して、今度の参拝となった。

昭和五十二年度 宗像会々員名簿
◇八幡宗像会◇（その二）

安部 兵次
大和藤三郎
富田 良七
森田 喜一
森田 良一
正野 満二
片岡 利光
戸畑区西鞘ケ谷二六一〇
赤田 智男
本田今三郎
小島 清美
金丸 正吏
水上忠之輔
赤田 麗行
滝口 宰
大和 健宗
麻生ハツヨ
木原フジヨ
真鍋 良金
真鍋 公昭
真鍋 研
高田 四郎
乙藤 襄夫
天野 虎男
高山 弥三
永島 好子
神谷ちとせ
伊賀 寿郎
花田 保男
吉野 浩三
安永 岳夫
豊福常次郎
藏野 英男
岡田 嘉輔
野口 俊幸
安部 謙一
花田 博見
西原 豊
高宮 弘光
伊豆貴久郎
阿部 博明
吉武 竜勝
滝口千鶴子
有田 岩男
大竹 虎巳
片山ヒロ子
高島 守義
中野 好光
日高アキノ
中島ヨネ子
森内 襄吾
吉田 澄子
石丸 松子

八幡東区春の町四丁目六一〇
〃 〃 〃 五丁目九一五
〃 〃 〃 八一四
〃 〃 西本町一丁目五一七
〃 〃 〃 〃
〃 〃 〃 〃
〃 〃 春の町三丁目八一二
〃 〃 〃 〃
〃 〃 〃 〃
〃 〃 〃 〃

宗像大社歌会 俳句作品集（一七八）

心字池紅葉映して鯉悠々　藤沢　玄洋子

朱子菊や残りの花のやぶれ傘　名古屋　野崎　雄三

熟れ柿の梢にすわる富士の峯　津屋崎　井浦　良三

海に塵捨てし背後の星冴ゆる　土穴　八尋　恒夫

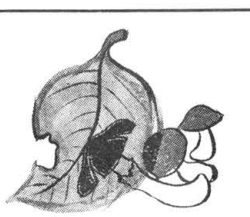
子に譲り晩年楽し菊作り　田熊　力丸　一郎

鵯啼音万里片雲影なし　福間　広渡一寸毛

実は落ちて葉はふるいゆく富有の秋　宗像　岡田　無名

寄附札の下をくぐりて秋彼岸　田島　有吉　唐水

大輪の菊の香りや大臣賞
曼珠沙華今我が庭に火と燃ゆる



機械化の稲刈る田里区画整地
初孫の男子誕生文化の日

ナゾとロマンを印象づける

古代黒潮文化・玄界灘特別展講演会

黒潮による南方文化と北方から の大陸文化の十字路として、玄界灘は古代日本の文化形成に大事な役割を果たした。この「海上の道」に位置し「海の正倉院」とも呼ばれる沖ノ島、大島、それに福岡県玄海町に「宗像三神」をまつる宗像大社と朝日新聞社の共催で「古代黒潮文化・玄界灘特別展――海と神と人」が、いま大社宝物館で開かれている（三十日まで）が、その記念講演会が三日、福岡市の福岡朝日ビル八階ホールであった。講師は谷川健一（評論家・民俗学）、国分直一（梅光女学院大教授・考古学）、岡崎敬（九州大教授・考古学）の三氏。それぞれユニークなテーマを掲げ、最近の研究成果を交えながら古代文化に対する年来の持論を語った。

◆南北文化結合論を展開

谷川氏の演題は「耳と目の結婚――弥生基層文化の形成」。古代像を探るには民俗学、考古学、歴史学（文献学）三者の提携が必要だが、古代人の心情をつきとめるには民俗学の面からの追求がとくに大事であると前置きし、記・紀の神話や各地の伝承など豊富な例証をあげながら、独自の南北文化結合論を開陳した。

記・紀に天目一箇神（あまのまひとつのかみ）の名が出て来る。昔話に登場する一目小僧（ひとつめ・こぞう）によく対比されるが、柳田国男はこれを祭りのいけにえにする人の片目をつぶした風習から来たものだとしている。これに対して谷川氏は『出雲風土記』など事する人たちが、タタラの火を長く見つめていると失明する職業病に由来すると主張する。したがって、この神は朝鮮半島から金属器文化を運んだ技術集団の人たちを象徴するのだという。

また、「ミミ」という名を持った人たちが九州を中心に、西日本各地に点在する。ミミとは、大きな耳環をさげる南方の西族（しゅうぞく）を意味し、弥生初期から南九州に定着している。稲作文化を運んだのはこの人たちである。神武天皇は日向・耳川の河口、美々津から船出し、以後九代にわたって「耳」の名がつけられた。

こうして南方稲作文化の「耳」と北方金属文化の「目」とが日本列島の中で結合し、日本稲作文化を前進させたときに、日本の弥生文化の基層が定まった、というのがその結論だった。

◆スライドで文化の変遷紹介

国分教授の演題は「蛇鈕（だちゅう）の印をめぐる問題」。古代の漢民族朝廷は周辺の朝貢する各民族に、それぞれの特性に応じた印を与えた。これを区別するのは印のつまみの飾りで、模様はいずれも動物が使われた。このうち、ヘビの模様が使われたのが、志賀島の金印に代表される「蛇鈕印」である。ヘビは南の動物で、この印を与えられたのは黄海と大陸東南海岸の民族に限られていた。いずれも、漢・朝鮮親縁、友好関係があった地域で、同教授はこの地域を「倭的世界」と呼んでいる。

志賀島の金印は「漢委奴国王」と彫られているが、倭（委はその略）と呼んだ国は大陸にもあり、必ずしも日本だけを意味しない。この倭的世界の生業、交通の手段として使われたのが、昨年の「韓国美術五千年展」にその拓本が展示された韓国蔚山市郊外の盤亀台岩刻壁画にあるコンドラのような舟だった。これと同形のものが、現在も華南地方にあり、日本に稲の種を運んだのもこのような舟だったに違いないという。講演では、多くのスライドを上映して、古代のさまざまな文化交流や変遷の跡を紹介した。

◆海人の活躍ぶりを解説

岡崎教授は「古代海人族」と題し、古代の文化、産業の重要なにない手であった海人たちの実態を紹介した。海の幸を求め、海上輸送に従事して、かけがえのない塩や海洋の蛋白（たんぱく）源を補給し、新しい文化や物資を提供してくれた彼らの活躍ぶりについては、これまで一般にはあまり紹介されず、海人自体の研究も他の部門に比べてそれほど進んでいるとはいいがたい。同教授は古くから遠く日本海沿岸の能登半島地方まで進出していた宗像七浦の一つ、鐘崎の海人（あま）の活躍にふれ、古代の漁民の気質、伝統が現在も残っていると指摘した。

三氏の講演には、当然のことながら『魏志倭人伝』の記事が豊富に引用された。それぞれの所説に一部異論もありそうだが、ともかく会場を埋めた三百人の聴衆には古代史のナゾとロマンをあらためて印象づけた集会だった、といえるだろう。

（昭和五十二年十一月五日付朝日新聞より転載）

――◇――

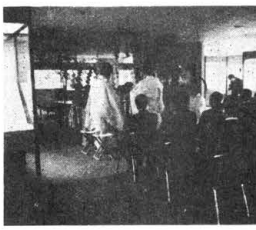
ご愛読いただいております「浜の寄物」（いしいただし氏著）は今月号休載致します。次号より掲載致しますので宜しくご了承願います。

［宗像］編集部

出光美術館に於いて 沖ノ島特別展開かる

――三笠宮殿下ご臨席を仰ぎ――

宗像大社沖ノ島神宝展（株）本社）に於いて、開会されが十一月一日、出光美術館（東京都千代田区丸ノ内三―一―一）出光興産



た、同展は本年十二月二十二日迄、開催される。

沖ノ島の祭祀神宝は「海の正倉院」とも称され、全国にあまねく知れ渡っている。

神宝展開催に際し、十月三十一日午后三時、展示会挙告祭を斎行、神宝展の成功と安全との敬虔な祈を捧げ祭典を終了した。

同日午后五時より、三笠宮殿下の御臨席を仰ぎ、各界の代表者を招待し、沖津宮祭祀神宝を御披露、和やかな談笑理に散会した。

今回の神宝展は、昭和二十九年から三十三年までの第一次・第二次沖ノ島祭祀遺跡発掘調査の出土品と、同四十四年から四十六年までの第三次調査より出土品約二千点が展示されている。

沖ノ島は、玄界灘の真只中にある周囲約四キロメートルの孤島であり、当大社三宮（沖・中・辺津宮）の内、沖津宮の鎮座（主神・田心姫神）する島で、古くより「神島」として深い崇敬と信仰を受け、その伝統は今日もなお護られている。

古代祭祀跡は、沖津宮を中心とした、亜熱帯性の原生林と、重畳する巨岩石郡の中に二十四ケ所発見されている。これらの祭場は四世紀後半代から九世紀（平安時代初頭）にかけての長年月に渡る祭りの跡で、発見された神宝は十万余点を数えている。

祭祀遺跡を形的に分類すると岩上祭祀・岩陰祭祀・半岩陰、半露天祭祀・露天祭祀の四段階に区分される。

四～五世紀段階の岩上祭祀での神宝は、漢式鏡を中心に刀・剣・玉類・釧類等の装身具が主体となっている。

岩陰祭祀に於ては、朝鮮新羅系の金指環と斧・鑿・雲珠等の馬具類をはじめ、遠くササン朝ペルシヤのカットグラス・滑石製祭祀品・金属製雛形品とがみられる。

半岩陰、半露天祭祀においては金銅製龍頭・唐三彩・金銅製紡織具等、七から八世紀の時期にあたる。

露天祭祀は一号遺に代表されるが、約一〇メートル四方に大量の人形・馬形・舟形と土器類が散布し、なかに奈良三彩・富寿神宝等奈良時代末から平安時代初頭の祭祀遺跡であることがうかがえる。これら豪華精巧な祭祀神宝の出土より、四～五世紀に、大陸との対外交渉が密接に始まるにつれて九州と朝鮮半島を結ぶ宗像の地を拠点とした、胸形君が祀る宗像大神は大和朝廷の祀る神となった。

「年中人事」

年玉（としだま）

もともと年玉は、正月の神への供物で、同時に神上り賜わるものであった。それが正月の贈物となり、普通正月に大人が子供達におくる贈物となった。

年玉は、初め米とか餅などの食物であったが、次第に食物以外の子供の喜ぶ凧・コマ・羽根・人形などの玩具、絵紙・絵本・筆・紙・墨などの本や学用品となり、金銭を紙に包んで贈ることもある。

神に供えたものを分け与える意味があったが、年頭に限らない。外国のクリスマス・プレゼントに相当しよう。

中元（ちゅうげん）

上元・下元と並んで三元の一。上元は正月十五日、下元は十月十五日。日本では下元はほとんどにされない。七月十五日を中元といい、この日盂盆の行事をなして亡霊に供養したのに対し、生見玉として存生している父母に供養し、一年生存の無事を祝し合うことになった。

この日、親戚知人がたがいに往来訪問しあって交情を深めることになった。江戸時代には二の日はことに往来が頻繁をきわめた。交際の広い者は次第に中元前後にその礼をつくすようになった。

盆の機会の中元贈答が重視され、ことに小麦粉系統の品、うどん・そうめんの類を贈ることが多い。

明治以後、七月上旬から使者を使って中元の礼を行わせたが、中元は次第に贈答品の称になり、形式に流れてその本旨を失った。出入商人が中元の団扇や手拭を得意先に配布する風があり、諸商店は中元を期して中元売り出しを行い、市中は中元贈答のためにきわう風が盛んである。

近代になって大都会では白砂糖、田舎では魔物などが選ばれたが、現在では種々の商品が用いられるようになった。中元に近い旧暦八月一日の行事に八朔（はっさく）がある。これは農民が田の実りを祝う農村の風俗であったが、鎌倉時代後期から、武家社会に広く行われて公儀の贈答慣例となり、南北朝時代以来例化し、贈答に扇子や太刀・牛・馬・紙などさまざまなものを贈りあった。これを懸（たのみ）ともいった。中元と八朔が結合してしまったものもあるが、タノミ節供として残っているところもある。

歳暮（せいぼ）

歳の暮の贈物をいう。時期は暮の二十日からとか、二十八日からとかいって、ところによっては随分早くからするところもある。

贈る物は、魚類・米粉・素麺のような食品から種の日用品に及んでいる。魚は塩鮭・塩鰯・鯖・シイラ・スルメなどが用いられるところもあり、贈り先は、親・里の親・仲人・親方などが普通である。大家では贈られた塩鮭をすぐりと掛け列べて交際の広いのを誇りとした。

盆の贈物を盆セイボと呼ぶところもある。普通、子方から親方に対して感謝礼の意味をこめて贈られるが、ところによっては親方によっては親方から子方へ平素の手伝いに対する礼として歳暮を贈るところもある。近代になって職場の上役に対し下僚が贈るようになった。

年末商品の大売出しを歳暮市というところもあり、中元と共に商品購買の旺盛な季節である。歳暮の贈答が郵便で送られたり、物品が商品券で代用されたりして、歳暮の形がくずれかけている。

◇十一・十二月祭典行事案内◇

◇辺津宮

十一月二十三日
新嘗祭　午前十時
この祭典は、秋の五穀豊穣収穫の神護を感謝し、神慮を慰め奉る祭です。この日を勤労感謝の日として祝うのはこの精神に基くものであります。
各位祭典に参列下さいますようご案内申し上げます。

十二月一日
月次祭　午前十一時

古式祭　午前六時
十二月十五日
（お座）　午前六時半より
その年の新穀で作られた御飯、酒をはじめ古式に則り年母（くねんぼ・ミカンの一種）、菱餅のお菓子、江口の浜からあげられる「ゲバサモ」（海藻）等の特殊な神饌を供え、五穀豊饒を感謝する祭であります。祭典終了後の直会を「お座」と言う。「お座」には新筵（にいむしろ）が敷かれ、忌穂（いみほ）の刺し立てられた御飯を栗の木皆で食し、無病息災を神恩に謝すと共に、翌年の五穀豊饒を祈念する神事であります。この「お座」は一番座と六番座位まで行なわれます。
古式祭神事は、郡民の厚い信仰に支えられて約八百年も続いている民間伝承の、当大社唯一の祭りであります。郡内外より例年多数の参列があり盛大に行われます。
本年も各位参列下さいますようご案内申し上げます。
「お座」料は米一升と定められております。（お金でもよい）

十二月十五日
鎮火祭　午前九時
この祭典は、郡内の氏子の家を火災より守るための祭典で、郡内五ケ町村の町村長、消防団関係、宗像警察署等の関係者多数列のもと、拝殿に於いて鎮火の神事を行なっています。

◇中津宮

十一月二十一日
宮崎厳島神社祭　午前十一時
大島村宮崎に鎮座する厳島神社の祭典で、大漁満足、海上安全を感謝する祭であります。祭典には宮崎地区全員参列しこの日は漁止となります。

十二月一・十五日
月次祭　午前十一時

十二月三日
恵比須祭　午前十一時
この祭典は、大島村恵比須宮の祭典で、大漁満足、海上安全の祈願を中津宮本殿、並末社恵比須神社に於いて斎行致します。
この日は全村漁止となります。

◇沖津宮

十二月一・十五日
月次祭　午前十時